

難聴者が暮らしやすい環境づくりを

水野 映子

<ひとごとではない難聴の問題>

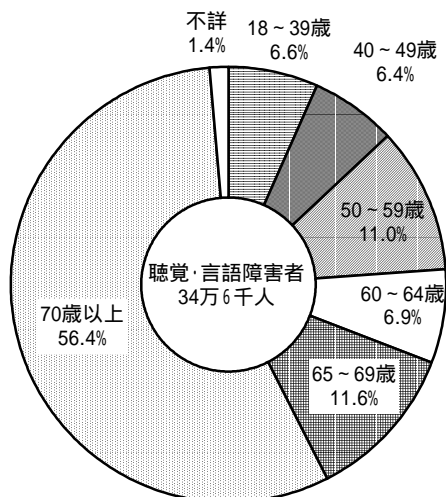
9月15日は敬老の日。耳の遠くなった祖父母や両親のことを、日頃から心配している人は少なくないであろう。

厚生労働省が5年ごとに実施している「身体障害者実態調査」によると、聴覚・言語障害者は2001年では約34万6千人いる。そのうち高齢者、すなわち65歳以上の人は67.9%であり、実に全体の約3分の2を占めている（図表1）。

この統計における聴覚障害者数は、音声を聞き取りにくいと感じる人々のごく一部に過ぎない。なぜならば、日本で聴覚障害者として認定されるのは、両耳の聴力レベルが70dB（40cm以上離れた場所での会話を理解できない程度）以上という、聴力レベルのかなり低い人のみであるためである（図表2）。しかし、25dB程度でも軽度の難聴とされることはあり、また40dB以上の難聴者は人口の約5%、すなわち日本では約600万人存在するという説もある。しかも、年をとってから聴力が低下した人は、聴覚障害者に認定されるための手続きをしない場合もあると考えられる。したがって、聴覚障害の認定基準に達している人も実際にはもっと多い可能性がある。

高齢社会の現代において、難聴をめぐる問題は、個人にとっても社会にとっても、決して小さくないと言える。

図表1 聴覚・言語障害者の年齢構成



資料：厚生労働省『身体障害児・者実態調査結果』（2002年8月12日報道発表資料）

図表2 聴覚障害の障害程度等級表

| | |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2級 | 両耳の聴力レベルがそれぞれ100dB以上のもの（両耳全ろう） |
| 3級 | 両耳の聴力レベルが90dB以上のもの（耳介に接しなければ大声語を理解し得ないもの） |
| 4級 | 1 両耳の聴力レベルが80dB以上のもの（耳介に接しなければ話声を理解し得ないもの） 2 両耳による普通話声の最良の語音明瞭度が50%以下のもの |
| 6級 | 1 両耳の聴力レベルが70dB以上のもの（40cm以上の距離で発声された会話を理解し得ないもの） 2 一側耳の聴力レベルが90dB以上、他側耳の聴力レベルが50dB以上のもの |

注：dB（デシベル）は、音の強さの単位

資料：身体障害者福祉法 別表第5号「身体障害者障害程度等級表」より「聴覚障害」の部分抜粋

< 補聴器活用のためには >

耳の不自由な人が使う代表的な道具としては補聴器がある。その市場動向を見てみよう。

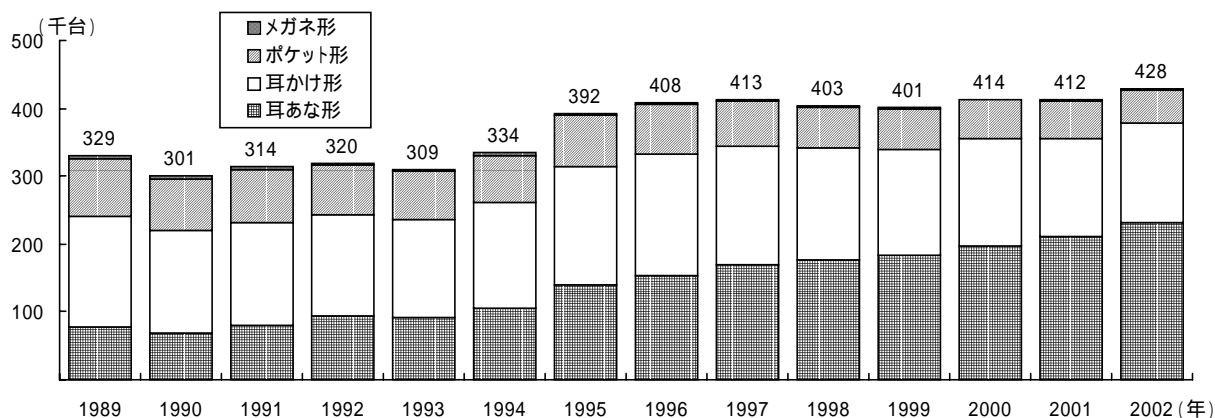
日本補聴器工業会によると、2002年における補聴器の出荷台数は約42万8千台であった。また、その推移をみると、2001年から2002年の間には微増したものの、全体としては近年横ばいの傾向が続いている（図表3）。

一方、経済産業省が実施した福祉用具の市場規模推計によると、2001年度における補聴器の市場規模は252億円であった。参考までに他の製品と比べると、この金額は眼鏡の2,774億円の1割にも満たないどころか、車いすの337億円よりも少ない（経済産業省『2001年度における福祉用具市場規模推計値について（2001年度福祉用具・共用品市場規模調査結果概要）』2003年6月16日報道発表資料より）。

そもそも使用対象者の数が異なる眼鏡と補聴器を単純に比較することはできないが、それにしても日本人の生活に補聴器が浸透しているとは言いがたい。補聴器の普及を阻む要因はさまざま考えられるが、その一つとしては、眼鏡などに比べ補聴器の使用に抵抗を感じる人が多いことがあげられる。そうした人々のために、補聴器は一般に、目立たないように肌に近い色になっているが、かえってそれが嫌だという人も少なくないようだ。補聴器装用者からは、補聴器の色が「気持ち悪い」「肌着をイメージさせる」などの意見も聞かれる。

そのような声を受け、最近では、一部ではあるが色付きの補聴器も販売されるようになった。アパレル業者と手を組み、カラフルな補聴器を開発したメーカーもある。補聴器を隠したいとは思わなくなり、眼鏡のようにファッションとして楽しめる時代が来るのも近いかもしれない。

図表3 補聴器の出荷台数の推移



資料：有限責任中間法人 日本補聴器工業会 ホームページ（URL <http://www.jhima.org/>）より作成（2003年7月31日収載）

< 補聴器以外の面での工夫も必要 >

では、補聴器を使うことによって、音声の聞き取りにくさはどの程度解消されるのであろうか。補聴器販売・製造事業者などから構成される「補聴器供給システムの在り方研究会」は、補聴器販売店の顧客、すなわち補聴器ユーザーを対象とした「補聴器普及のためのニーズに関する調査」を実施した。図

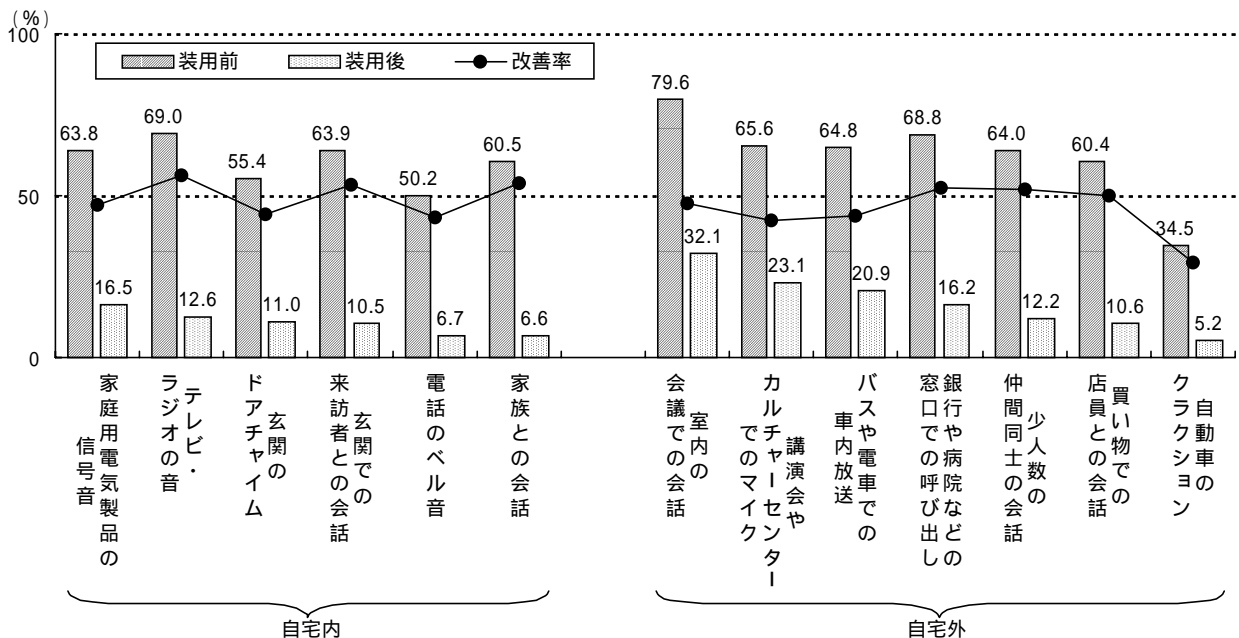
表4は、補聴器を装用する前後それぞれにおける音声の聞き取りにくさを示している。

これをみると、わからない(「わからない」+「あまりわからない」と答えた人の割合は、補聴器の装用前においてはほとんどの音声で過半数を占めているのに対し、装用後では50ポイント前後減っている。つまり、補聴器を使うことによって、半数程度の人々の聞き取り状況が改善されている。しかしながら、それぞれの音声について詳しくみると、補聴器の装用後においてもなお、「室内の会議での会話」(32.1%)などの自宅外における音声を中心に、わからないと答えた人の割合が比較的高い項目もある。補聴器の効果には限界もあることがうかがわれる。

これらの限界を補うためには、より性能の高い補聴器の開発や、補聴器の正しい選択・調整の促進が必要であるとは言ってもない。だが、補聴器以外にも、難聴者の情報入手を助けるための方法はいろいろある。例えば、音声情報を文字や光などの視覚情報や振動などの触覚情報で補う方法はその1つだ。図表4の項目を例にあげれば、「バスや電車での車内放送」は、車両内に電光表示板等を設置することで、視覚的に情報が補完される。「玄関のドアチャイム」や「電話のベル音」を光で知らせる装置もしい。また、音声そのものを聞き取りやすくする方法もある。その例としては、家電製品などの報知音を工夫したり、会話の際にゆっくり明瞭に話したりすることなどがあげられる。

高齢化がさらに進む今後は、社会全体で難聴者の暮らしやすい環境づくりに取り組んでいく必要性が、ますます高まるであろう。

図表4 補聴器装用前・後における音声の聞き取りにくさ



注1：装用前・装用後の割合は、それぞれ「わからない」または「あまりわからない」と答えた人の合計

注2：改善率は、装用前の割合から装用後の割合を引いた値

資料：補聴器供給システムの在り方研究会『補聴器普及のためのニーズに関する調査 - 補聴器供給システムの在り方に関する研究』1年次報告書 - 2002年11月